

あとがき

編集委員会を代表して 明神 勲

〔大学院生協議会史の嚆矢〕

本書は、「本邦初の大学院生協議会（院協）の歴史」を  
目指して編集されたものであるが、これまでわれわれが収  
集しえた資料と時間の制約からいくつかの宿題が残されて  
いる。第一に、通史とはいっても時期、研究科、分野によ  
り厚薄や欠落があり、紛失した部分を沢山残したピクチャ  
ア・パズルの感がある。たとえば時期でいうと、一九七〇  
年代前後が中心でそれ以後、とりわけ一九八〇年代以降は  
極めて手薄である。研究科については理学研究科、農学研  
究科は比較的手厚いが、法学研究科、工学研究科、薬学研  
究科は手薄となっている。また女性の手による原稿をもつ  
と収録しなかったが果たせなかった。第二に、これは主に  
時間の制約によるものであるが、院協史研究の「宝の山」  
とも言える収集した膨大な資料を精査しこれを活用するこ  
うな点でまだ不充分さが残ったということである。

同時に、本書はこのような限界はあるにせよ、院協につ  
いてのまとまった通史が全国的にも単位院協においてもこ  
れまで存在しなかったと言われるなかで、北大院協に限定  
されてはいるが、院協についての通史の作成を試みたとい

う点では「本邦初」という評価は許されるであろう。とり  
わけ本書の白眉ともいえる詳細な年表と資料リストは、今  
後本格的な通史を作成するための貴重な素材を提供するも  
のであり、通史作成の足場づくりとなるものである。資料  
リストの収集作業は主として羽田、岡、手島の各編集委員  
の努力に負うところが大きく、これを岡がとりまとめたも  
のである。また収録した多くの証言は、資料と異なり、今  
の時期でないと消滅し再現不可能な記憶の記録化であり、  
当事者ではないと語ることでできない内容は院協史を生き  
た姿で描きそれに血肉を与える点で貴重なものである。そ  
こでは、「北大という場で大学院生が、生き、学び、考え、  
悩み、喜び、連帯し、たたかい、成長した歴史」（「編集後  
記」佐久間亨）が生き生きと描かれており、研究と生活の  
悩みと格闘した若き研究者の「成長と苦悶と交誼」（「編集  
後記」佐々木忠）の運動の歴史が示されている。その意味  
で本書は、本格的院協史作成のための一里塚を築いたもの  
と位置づけることができよう。本書に続き、かつて院協運  
動の全国的牽引者であった全院協およびその傘下で活発な  
運動を展開した京大院協、東大院協など個別院協の歴史が  
編まれることを願ってやまない。その時に、院協史は本書  
をもって嚆矢とする、と評されるであらう。

〔院協の誕生・展開・後退の概要〕

本書は一九六〇年前後からの高度経済成長の時期と一九

九〇年前後からの経済成長の終焉と「失われた三〇年」とよばれる低成長・衰退の時期までの約四〇年余の北大における院協運動の歴史を扱っている。

日本の戦後史において人々が自分や社会の未来に対して大きな希望を抱く、「大きな物語」を描いた時代は二度あった。敗戦直後の平和・民主主義・豊かさを希求した一時期と一九六〇年代前後から八〇年代にかけての高度経済成長の時代である。本書の前半で対象とした高度経済成長の時代について、ある経済学者（松原隆一郎）は「高度成長期というのは日本国民にとって将来に希望を抱き無心に活動したまればほど幸せな時期であった。所得こそ低かったが空は青く……目先の仕事に打ち込むと予想を超える見返りのある日々であった。」（共同通信文化部編『書評 大全』二〇一五年、三省堂、二八五頁）と指摘している。この時代背景を舞台に院協運動は誕生し、発展をとげ、一九七〇年前後はその最盛期を迎えた。そして、一九九〇年前後から始まる「失われた三〇年」と呼ばれる日本経済の低迷・衰退の時期に、院協運動も停滞と後退の歴史をたどることになった。

## 〔院協の現在とその未来——院協の再建・再生は「文法命題」〕

院協というマイナーな存在の歴史を、今さらまとめるとにどのような意味があるのか？——最初の編集委員会で

こんな疑問が出され、その後何回か論議がかわされたと記憶している。今記録に残しておかないと忘れ去られてしまいかも知れない院協運動を歴史的事実として後世に伝えること、とりわけ将来の院協の再構築に何らかの示唆を与えることができるのではないか——当初の大まかな共通認識はおよそこのようものであったと思う。本書の編集者・執筆者はいずれも院協運動の最盛期の体験者であり、いわば「まればほど幸せな時期」の息子として生れ育った者たちである。かつての自分たちの自慢話や院生に教訓を垂れるような姿勢は戒めなければならぬということも話されていた。これがどれだけ達成されたかは心もとないが、将来の院協組織の再構築への貢献という心意気は正当なものであったと思う。

かつて全国の大学院協の多くを網羅し、活発な運動を牽引した全国院生協議会（全院協）は、現在、組織としては存続しているが、加盟院協は極めて少数となっている（二〇二〇年現在、四大学の院生協議会・院生自治会によって構成され、三大学の三研究科がオブザーバー参加）。北大においても現在、農学研究科、教育学研究科において個別の院協組織は存続しているが、全学的組織としての北大院協は存在せず、この組織が消滅してから約二〇年が経過しようとしている。このような状態が続く中で、現在では院協を知らない院生が大部分となっているのではないだろうか。また、現在大学院生数は一九七〇年代に比べ数倍に増

えており、さらにその構成も多様化、複雑化しており、院協の再構築にはかつてと異なる大きな困難が立ちはだかつているのは事実である。しかし、研究者として成長したい、研究成果をあげたい、そのための条件整備をしてほしいという願いや要求は、われわれの時代と変わることはない大半の院生の思いであろう。そうであるならば、大学院が存在し、そこに院生が存在するかぎり、院協は多くの困難を乗り越え、何らかの契機で（北大院協の場合はその一つが「白書運動」であつたが）いつの日にか必ず再建されるであろう。オーストリア生まれの哲学者ウイトゲン・シュタイン（一八八九—一九五一年）は、疑う余地がなく信じていることのできる知識や、その反対の事が想像できない命題、どんなに疑おうとしても疑うことのできない命題を「文法命題」と定義したという。この定義を借りるなら、全国、そして北大の院生協議会の再建と再生は「文法命題」、である、と断言することができよう。

### 〔未来の院生への伝言〕

E・H・カー（一八九二—一九八二年）の「歴史とは現在と過去との対話である」という彼の歴史哲学を要約したフレイズは広く知られているところである（E・H・カー『歴史とは何か』岩波書店、一九六二年）。さらにカーは「歴史とは何か」についての検討を進め、「歴史とは過去と未来の対話である」という見解を提示している。すなわち、「未

来だけが、過去を解釈する鍵を与えてくれるのです。そして、この意味においてのみ、私たちは歴史における究極的客観性ということをや々することが出来るのです。過去が未来に光を投げ、未来が過去に光を投げるとするのは、歴史の弁明であると同時に歴史の説明なのであります。」という指摘に続き、「ですから、歴史とは過去と現在との対話であると前の講演で申し上げたのですが、むしろ、歴史とは過去の諸事件と次第に現れて来る未来の諸目的との間の対話と呼ぶべきであつたかと思ひます。過去に対する歴史家の解釈も、重要なもの、意味あるものを選択も、新しいゴールが次第に現れるに伴って進化していきます。」という歴史哲学の新たなテーゼを提示したのであつた。

成田龍一は、カーの「歴史とは過去の諸事件と次第に現れて来る未来の諸目的との間の対話と呼ぶべきであつた」という新たに示されたテーゼに着目し、「『未来の諸目的』との対話、ということとは、未来の『他者』との対話ということになります。」と指摘している（成田龍一『戦後史入門』河出書房新社、二〇一五年）。本書は、院生協議会の再建という「未来の諸目的」への期待と願望を抱きつつ、院生協議会の再建を志すであろう未来の院生への伝言、「未来の院生との対話」としての思いを込め編集されたものである。二〇二二年四月にスタートした本書の編集作業は、学問・科学を国家や経済の政策手段化し、国家総動員体制の構築を図る「学問の自由の新たな戦前」的状況が次々と進

行するなかで進められた。それだけに、未来へ架橋する存在である「学問の自由」の息吹を再生させるためにも、院協の再建と再生という「未来の諸目的」とそれへのわれわれの思いは一層強め固められた。

「学問の自由」は、経済発展レベルや自由民主主義政治体制の度合いにかかわらず、欧米先進国を含めての権威主義政治の出現によって世界的に危機にある。しかし、真の危機は、学術世界に対する外圧だけではなく、大学人そのものが、功利主義や業績主義に縛られ、みずからのエトスとして真理への希求を弱め、社会の指導者が事実と真理への尊敬を失っていることにある。われわれは、自由の精神を引き継ぐひとびとへのエールとしても本書を上梓した。本書が、困難な中で院協の火種を守り続け、二〇〇四年以降「大学院生の経済実態に関するアンケート調査」を全国規模で実施し研究条件の改善や「学問の自由」擁護の運動を継続している全院協をはじめとする各大学の院協のメンバーに読んでいただけけるならば幸甚である。さらに、本書が、研究活動のさらなる充実を求めている多くの院生たちとの出会いの機会に恵まれるならば、われわれとしてこれにすぎずる喜びはない。

#### 〔謝辞〕

本書の刊行が実現しえたのは、ひとえに多くの方々の支援と激励によるものである。

まず、本書出版にあたり「未来への覚書」ともいえる貴重な証言を寄せていただいた執筆者のみなさん、そして協力募金に応じていただきわれを精神的・財政的に支えていただいた院協OBを中心とする多くの方々、厚くお礼を申し述べたい。さらに、荒又重雄氏（北大経済学部名誉教授）と高村泰雄氏（北大教育学部名誉教授）のお二人には長時間にわたるヒアリング調査に応じていただき本書の内容を深い視点から構成するうえで貴重な示唆をいただいたことに感謝したい。また、本書の編集・執筆にあたり貴重な資料について閲覧、複写の便宜を与えてくださった北大文書館に深く感謝の意を表す。そして最後に、商業ベースにのるとは思われぬ本書の意義を評価され、出版を心よく引き受けていただいた花伝社に記して心よりお礼を申し述べたい。

（二〇二四年三月）